

令和4年度 学校経営計画及び学校評価

1 めざす学校像

豊島高等学校の校訓である、「克己」の精神に基づき「自主・自律」の心を育み、「己を鍛え、己を磨き、ともに切磋琢磨する」「他を思いやり、己を大切にできる」人材を育成する。

- 1 将来の自己実現の志をしっかり持たせ、その夢を叶えるべく、充実した誇り高い高校生活を送ることができる学校をめざす。
- 2 普通科専門コース制を有する学校として、各コースの特色を活かすとともに、自己の興味・関心を自己実現へとつなげていく。
- 3 「Smile&Positive」をスローガンに、笑顔絶やさず常に前向きに何事にも取り組む人材の育成をめざす。

2 中期的目標

1 学ぶ力の育成

(1) 主体的に学ぶ習慣の育成を図り、総合的な学力の向上を図る。

- ア 授業の準備と振り返りを常に行い、主体的に学ぶ態度を育成する。
- イ 主体的・対話的で深い学びが行えるよう授業展開を工夫して生徒の学習意欲を向上させ、学習内容の定着を図る。またこれにより一斉講義形式の授業からの脱却をさらにすすめる。
- ウ 学力生活実態調査等を活用しながら、生徒の学びの習慣や学習への取り組み状況、学習到達度の推移を把握し、指導法の改善等を追究していく。
- エ 授業外の校内での学習活動の充実を図り、進路自習室、進学特別ルーム（会議室）、アドバンス学習室（視聴覚室）の積極的な活用を行う。
- オ 学習産業の教材も活用しながら、効率的に「朝学」にも取り組み、漢字・英単語の学習、読解力の育成等に取り組み、その予習・復習を促しながら家庭での学習習慣の定着を図る。

※学校教育自己診断（生徒）「本校の授業を十分に理解するためには、予習や復習が必要である。」の肯定率を3年後に75%にする。（令和元年度55%、令和2年度60%、令和3年度64%）。

学力生活実態調査で、1年生の間に生徒のゾーン占有率の低下をできるだけさせない。3年後にはBまでの人数の全体に対する割合を40%、同じくDの割合を8%以下とする。（Bまでの割合：令和元年度23%、令和2年度32%、令和3年度31%、Dの割合：令和元年度16%、令和2年度16%、令和3年度15%）

(2) 「わかる授業」、「課題解決型の授業」の創造に取り組む。

- ア 様々な教科・科目で単元・題材等内容のまとまりや区切りの中で、パフォーマンス課題等に取り組みせ、生徒に自分の学習状況を常に振り返らせ、グループワーク・班別討論～発表・相互評価活動に取り組みせる。また、日々の授業では教員の発問による授業展開の組み立てを研究しながら、「主体的・対話的で深い学び」の実践につなげていく。
- イ 観点別学習状況の評価を進め、計画・実践（指導）・評価・改善による、指導と評価の一体化をすすめる。
- ウ ICT機器を効果的に活用しつつ、1人1台のパソコンの活用をさらに進め、様々な指導法や教授法、さらにコミュニケーションツールとしての活用等の工夫に努める。

※学校教育自己診断（生徒）「本校の授業で、『自分で考える力』が身についた」の肯定率を3年後に75%に（令和元年度61%、令和2年度67%、令和3年度69%）、同じく「本校の授業等で、『物事に対する理解力』が、以前より身に付いてきていると思う」の肯定率を3年後に75%に（令和元年度61%、令和2年度68%、令和3年度72%）する。また、（保護者）「子どもは授業が分かりやすく楽しいと言っている」（令和元年度43%、令和2年度45%、令和3年度45%）の肯定率を3年後に60%にする

(3) コミュニケーション力、プレゼンテーション力を育成し、社会で生き抜く力と自己表現力を身につける。

- ア 各教科の授業に加えて学年の取組みや学校行事等を活用して、コミュニケーション力・プレゼンテーション力の育成に取り組む。
 - イ 国際共通語としての中心的な役割を果たしている英語の4技能（聞く・話す・読む・書く）をバランスよく育成する。
- ※学校教育自己診断における「本校の授業等で、『発表する力』（プレゼンテーション能力）が身に着いた」の肯定率を3年後に80%にする（令和元年度55%、令和2年度61%、令和3年度67%）。同様に、「本校の授業等で、『相手とコミュニケーションする力』が身に着いた」の肯定率を3年後に80%にする（令和元年度63%、令和2年度67%、令和3年度73%）

(4) 生徒の進路実現の支援

- ア 3年間の進路指導方針・計画の作成し、進路希望に合わせた進路指導および情報提供、進学講習等を計画的に実施し、早い段階での進路意識の醸成に努める。
 - イ 校内における進学講習や補習および土曜講習の拡充、夏季勉強合宿の継続及びone_day勉強合宿の拡充をめざす。
 - ウ 外部模試の計画的・積極的な受験を推進し、生徒が自分の目標と到達度を的確に理解する指導体制を作る。
- ※4年制大学進学率60%を維持する。
- ※土曜講習や夏季勉強合宿及びone_day勉強合宿の参加生徒参加率（9日間のべ人数）を3年後に150名にする（令和元年度土曜講習62名勉強合宿32名、令和2年度土曜講習35名コロナのため合宿中止、令和3年度土曜講習参加者34名、one_day勉強合宿120名）
- ※学校教育自己診断における「本校では、進路についての情報をよく知らせてくれる。」の肯定率を3年後に88%にする。（令和元年度65%、令和2年度69%、令和3年度75%）

2 自らの将来を見据え、将来の寄って立つぶれない軸を形成する取組みの推進。

(1) キャリアデザイン（以下CDと記載）の推進

- ア 自分の人生・生き方・進路について考えさせる「キャリアデザイン」を「ロングホームルーム」や「総合的な探究の時間」を活用して推進する。
 - イ 入学から卒業までの段階を踏んだCDプログラムに基づき、進路先の更に先にある職業意識を育む。
- ※将来の進路や生き方について考える機会がある」の肯定率を3年後に88%にする。（令和元年度79%、令和2年度79%、令和3年度82%）

(2) 人権意識の向上と自己肯定感の醸成

- ア 様々な分野・年齢の講師による講演等計画的な人権教育を実施し、豊かな心を育む教育を推進する。また、いじめを未然に防止し、早期に発見・解決するためにいじめに関する校内組織を中心に組織的に取り組む。
 - イ 学校行事・学年行事の企画・立案・運営に生徒が関わる機会を作り達成感を覚える取組みをする。
 - ウ 集団活動を通して、他者と望ましい人間関係・協働関係を構築できる人間性を育む。
- ※学校教育自己診断（生徒）「本校では、人権尊重や命の大切さについて学習する機会が多い」の肯定率を3年後に88%に（令和元年度77%、令和2年度77%、令和3年度82%）、「本校入学後、自分は前より成長したと思う」の肯定率を3年後に88%にする。

- 3 自主・自律の精神を養い、社会そして世界に繋がる生徒の育成
- (1) 社会性を育むために生徒の規範意識を高め、通学マナーの向上とあいさつ運動の励行に取り組む。
- ア 時間管理（自己管理）と時間を守るという意識の向上を図ると同時に、授業のベル即開始を徹底する。
 - イ 毎日の登下校時及び毎授業時間の開始・終了時の挨拶の励行。
 - ウ 「薬物乱用防止」、「情報リテラシー・モラル」の育成に努め、特に情報や情報技術を適切かつ安全に活用していくための資質・能力を身に付けさせる。さらに、生徒が加害者にも被害者にもならないように取り組みを行う。
 - エ 「挨拶」・「服装」・「頭髪」・「規律」・「自転車のマナー」等に関する生徒の規範意識を高めるため、家庭との連携のもとに日常の学校生活のあらゆる場面において全ての教員が積極的に生徒に声をかけ指導する。また地域連携も含め「交通安全講習」等の講習会を実施する。
- 学校教育自己診断（生徒）「学校生活について先生の指導には納得できる」（令和元年度 51%、令和2年度 54%、令和3年度 58%）、（保護者）「本校の生徒指導の方針に共感できる」（令和元年度 58%、令和2年度 60%、令和3年度 60%）、「本校の生活指導は、家庭との連携のもとに行われている」（令和元年度 43%、令和2年度 42%、令和3年度 45%）の肯定率をそれぞれ3年後に70%、70%、60%にする。
- (2) 特別活動・生徒会活動・社会貢献・国際交流を通じて自主・自律の精神を養い、地域社会との繋がりや国際感覚を身につける。
- ア 部活動充実のため、入学時のクラブ紹介、体験入部の企画を継続する。
 - イ 文化祭や2月祭で文科系クラブ等の生徒の学習の成果の発表の機会を設ける。
 - ウ 部活動を中心とした清掃活動を継続し、校内の特定箇所の集中清掃や校外の地域清掃を行う。
 - エ 生徒会活動や学校行事の活性化を継続して行い、生徒が主体的に運営する機会を増やす。
 - オ 文化や習慣の違いを尊重する精神等を育むため、語学研修や海外の高校との交流（オンラインも含めた）を促進する。
- ※学校教育自己診断の生徒「学校行事および部活動における平均肯定率」を3年後に80%にする。（令和元年度 69%、令和2年度 72%、令和3年度 75%）
- 4 学校全体の課題を共有して、解決に向けて取り組む
- (1) 分掌部会等の開催と他分掌や学年との連携を高める
- ア 業務の継承を行い、業務の効率化について検討をすすめる。業務マニュアルの見直しを含めて総括を行い、次年度への改善点の洗い出しを行う。
 - イ 運営委員会等の既存組織を課題解決の中心として活用推進する。
 - ウ 分掌間、分掌と学年の連携を高めるための取り組みを実践する。
- ※学校教育自己診断の「本校では、様々な教育問題に対して、学校全体で日常的に話し合っている」、「HR 運営や生徒指導等について教職員の連絡体制や研修体制が充実している」肯定率を3年後に60%にする。
- (2) 教員の働き方改革への取り組みを推進
- ア 毎月の安全衛生委員会で、教員の時間外在校時間を報告し、新たな取り組みを検討していく。
 - イ 様々な会議資料の事前配付により、会議の効率化、ペーパーレス化を図る。
 - ウ 運営委員会や職員会議に向けては、事前に検討課題を関係部署に提示して意見集約をしておき、検討～決定のプロセスをスムーズにし、見える化をしながら会議時間の短縮を図る
- ※職員会議の時間について50分以内を目標とし、その後にミニ校内研修の実施を年間10回以上行う。
- (3) オンライン授業の構築と取り組みの推進
- ア GIGA スクール構想に向け、校内環境のさらなる整備と休校等の際の学びの保障（動画配信・オンライン授業）、教材配信の実施に向けた対策を講じる。
 - イ 日常の授業でも1人1台の活用をすすめ、オンライン授業に切り替えてもスムーズに生徒が取り組めるように取り組む
- ※学校教育自己診断（生徒）の「本校の授業では、ビデオやコンピュータを活用している」の肯定率を3年後には88%にする。（令和元年度 73%、令和2年度 78%、令和3年度 81%）
- (4) 広報活動と地域連携の充実
- ア ホームページの全面改訂に伴い、適時更新などできるだけ多くの情報発信に努める。コロナ禍の中であっても、学校説明会や中学校との連携（中学校訪問など）をさらに充実させ、広報活動に取り組む。
 - イ 創立50周年を見据え、生徒・保護者・教員・同窓会等の連携体制を推進していく。
- ※ 学校教育自己診断（保護者）「本校は、教育活動の中身について、学年便りやホームページで情報提供している」の肯定率を3年後に80%にする。（令和元年度 69%、令和2年度 76%、令和3年度 73%）

【学校教育自己診断の結果と分析・学校運営協議会からの意見】

学校教育自己診断の結果と分析 [令和5年2月実施分]	学校運営協議会からの意見
<p>【学習指導等】</p> <p>・『自分で考える力』が身に付いた」の肯定率+12P、「物事に対する理解力」が身に付いてきている」の肯定率+11Pで、1人1台端末の活用やパフォーマンス課題の導入等、教員の取組の成果が表れているポイントであると考え、保護者アンケートの「子どもは授業が分かりやすく楽しいと言っている」の肯定率+8Pの53%に留まり、単に課題を課すだけではなく生徒個々の理解度の把握が必要で、授業の時にしかできない学びを展開し、理解度に応じてどのような指導をすべきか考えていかなければならない。また一つ上の課題に取り組む粘りや思考力・判断力の育成が必要かもしれない。</p> <p>・授業等で、『発表する力』が身に着いた」の肯定率+13P、『相手とコミュニケーションする力』が身に着いた」の肯定率+12Pとなり、授業展開の中でペアワーク、グループワーク、その他協働作業による活動、発表活動を積み重ねている成果が表れていると思われる。</p> <p>・「授業でのビデオやコンピュータ活用」の肯定率 93% [81%]。次年度以降はデジタル教材の共有や共同開発などにも取り組んでみたい。</p> <p>ただし、端末の自己管理方法についての課題は残る</p>	<p>第1回（6/24）</p> <p>○令和4年度 学校経営計画について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・働き方改革には一つ増やすなら二つ減らす必要がある ・先生方には元気であって欲しいが、学校だけでは解決しないこともあるのではないかと。 ・進学して3年後に、満足しているかどうかを問うてみて、それを進路指導の評価指標にしてみようか。 ・「何がしたいのか」、「自分で考えて行きたい進路先」を考えさせる指導は良い <p>第2回（11/18）</p> <p>○授業見学について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループワークを行う場合、グループ作りの際に机の配置等、気配りや“場の作り方”の工夫が必要。先生からの適切な声掛けも必要と感じた。 ・また、そのグループ構成の意図や役割分担も伝え、活動の振り返りをさせると良い ・ルーブリックの活用で自分や他者の発表に対する評価・改善がしやすくなる。 ・観点別評価の良さを引き出せるよう、授業ごとに何に重きを置いて評価するかを話し合い、必要に応じて3観点それぞれの評価割合を変えてみることも必要 ・中学校でも英語コミュニケーションの授業では英語に対する興味の有無やヒアリング能力等に差があり、40人に対する一斉授業では個別の習熟度に応じた授業展開が難しい。 ・教員が黒板に板書するのではなくスクリーンに明記されるので時間短縮になり、文字も非常に見やすく、教員の話聞くことに集中しやすかった。

<p>【生徒指導】 ・4年制大学進学率 60%以上、夏季勉強合宿や one_day 勉強合宿の参加生徒参加のべ人数 253 名、進路指導部の担当者の努力がよく表れた結果となった。 ・生活指導における「家庭との連携」の肯定率+22P、「先生の指導への納得」の肯定率+10P、生徒指導の方針への共感の肯定+14P で、課題は色々多い面もあるが、教員の取組が少しずつ浸透し評価されたものと考えている。</p> <p>【学校運営】 ・「様々な教育問題に対して、学校全体で日常的に話し合っている」の肯定率+25P、「HR 運営や生徒指導等について教職員の連絡体制や研修体制が充実している」の肯定率+22P。会議の時間ではなく、日常的な情報交換を増やすための取組が必要、また、来年度は教員研修を増やす予定。教員が最新の情報を掴むところから始めなければならない。 ・6月後半からペーパーレスの資料に切り替え、職員会議の時間についてはほぼ 50 分以内にできた。ミニ研修は5回しかできなかったが、学習支援クラウドサービスの活用研修を情報担当の教員が積極的に取り組んでくれた。来年度はさらに次の段階に進めていきたい (○) ・校務運営の効率化をさらに図るため、グループウェアの活用をさらに進めたい。</p>	<p>○スクールミッションについて ・教員だけでなく、保護者や地域の方たちにも、学校に何を期待しているかをブレインストーミングで作ってもらい、それを見せ合い統合すれば、新しい発見があるのではないかと。それをもとにシンプルで伝わりやすい方針を作ってはどうか。 ・教員や保護者、地域の方たちの期待を生徒に伝え、生徒達自身に少し背伸びをしたキャッチフレーズやスローガンを考えさせてみてほしい。 ・学生は同年代とコミュニケーションを取れていることで、異世代及び異文化コミュニケーションを取れると思っている。知識の習得だけでなく、コミュニケーション能力の向上と情報収集を個別最適化し、うまく活用できる能力を学ぶことが必要。</p> <p>第3回 (2/17) ・授業アンケートの結果を生徒に返して、「真面目に捉えてくれている、反映させてくれている」、「声を上げたことが活かされている」ということを何らかの形で示せないか。 ・テキストマイニング等を活用して、分析することも一つの方法</p>
---	--

3 本年度の取組内容及び自己評価

中期的目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標[R3年度値]	自己評価
1 学 ぶ 力 の 育 成	<p>(1) 主体的に学ぶ習慣の育成を図り、総合的な学力の向上を図る ア 主体的に学ぶ態度の育成 イ 授業展開を工夫して生徒の学習意欲を向上させる ウ 学習到達度の推移を把握し、指導法の改善 エ 授業外の校内での学習活動の充実 オ 学習習慣の定着を図る</p> <p>(2) 「わかる授業」、「課題解決型の授業」の創造に取り組む。 ア 「主体的・対話的で深い学び」の実践 イ 指導と評価の一体化をすすめる ウ 様々な指導法や教授法の工夫に努める。</p> <p>(3) コミュニケーション力、プレゼンテーション力を育成する ア コミュニケーション力・プレゼンテーション力の育成に取り組む。 イ 英語の4技能をバランスよく育成する。</p>	<p>(1) 主体的に学ぶ習慣の育成を図り、総合的な学力の向上を図る。 ア 授業の準備と振り返りを常に行い、主体的に学ぶ態度を育成する。 イ 主体的・対話的で深い学びが行えるよう授業展開を工夫して生徒の学習意欲を向上させ、学習内容の定着を図る。またこれにより一斉講義形式の授業からの脱却をさらにすすめる。 ウ 学力生活実態調査等を活用しながら、生徒の学びの習慣や学習への取り組み状況、学習到達度の推移を把握し、指導法の改善等を追究していく。 エ 授業外の校内での学習活動の充実を図り、進路自習室、進学特別ルーム(会議室)、アドバンス学習室(視聴覚室)の積極的な活用を行う。 オ 学習産業の教材も活用しながら、効率的に「朝学」にも取り組み、漢字・英単語の学習、読解力の育成等に取り組み、その予習・復習を促しながら家庭での学習習慣の定着を図る。</p> <p>(2) 「わかる授業」、「課題解決型の授業」の創造に取り組む。 ア 様々な教科・科目で単元・題材等内容のまとまりや区切りの中で、パフォーマンス課題に取り組ませ、生徒に自分の学習状況を常に振り返らせ、グループワーク・班別討論～発表・相互評価活動に取り組ませる。また、日々の授業では教員の発問による授業展開の組み立てを研究しながら、「主体的・対話的で深い学び」の実践につなげていく。 イ 観点別学習状況の評価を進め、計画・実践(指導)・評価・改善による、指導と評価の一体化をすすめる。 ウ ICT機器を効果的に活用しつつ、1人1台のパソコンの活用をさらに進め、様々な指導法や教授法、さらにコミュニケーションツールとしての活用等の工夫に努める。</p> <p>(3) コミュニケーション力、プレゼンテーション力を育成し、社会で生き抜く力と自己表現力を身につける。 ア 各教科の授業に加えて学年の取組みや学校行事等を活用して、コミュニケーション力・プレゼンテーション力の育成に取り組む。 イ 国際共通語としての中心的な役割を果たしている英語の4技能(聞く・話す・読む・書く)をバランスよく育成する。</p>	<p>(1) ア 授業アンケート結果における「授業に対するあなたの取組」令和3年度 95%を維持する イ 学校教育自己診断(生徒)「本校の授業を十分に理解するためには、予習や復習が必要である。」の肯定率 68% (令和3年度 64%) ウ 学力生活実態調査で、1年生の間に生徒のゾーン占有率の低下をできるだけさせない。3年後にはBまでの人数の全体に対する割合を 34% (令和3年度 31%)、同じくDの割合を 12%以下 (令和3年度 15%) エ 生徒向け学校教育自己診断の「授業以外にも、補習や講習が充実している」の肯定率 72% (令和3年度 69%) オ 生徒向け学校教育自己診断の家庭学習時間(1時間以上)の時間を確保している割合 40% (令和3年度 37%)</p> <p>(2) ア 学校教育自己診断(生徒)「本校の授業で、『自分で考える力』が身についた」の肯定率 72% (令和3年度 69%) イ 「本校の授業等で、『物事に対する理解力』が、以前より身に付いてきていると思う」の肯定率 75% (令和3年度 72%) ウ 同(保護者)「子どもは授業が分かりやすく楽しいと言っている」の肯定率 50% (令和3年度 45%)</p> <p>(3) ア 学校教育自己診断における「本校の授業等で、『発表する力』(プレゼンテーション能力)が身についた」の肯定率 70% (令和3年度 67%) イ 「本校の授業等で、『相手とコミュニケーションする力』が身についた」の肯定率 75% (令和3年度 73%)</p>	<p>ア 令和4年度は93%でわずかに目標に足りない。主体的に授業に取り組ませる工夫が必要。(△) イ 肯定率 78% (令和3年度 64%) で 14P 増。どの教員も授業改善に取り組んだ結果ではないかと思う。(◎)</p> <p>ウ Bゾーンまでが30%、Dゾーンの割合は12%で一定の目標値を維持するにとどまった。日々の学習習慣が物足りない点が課題で、観点別評価の導入と学力の実態および日々の学習支援をつなげていくことについて、見直しをする必要がある。(○)</p> <p>エ 肯定率 78%、進路部が中心となり教科や学年での取組の成果だと思われる。(○)</p> <p>オ 家庭学習時間(1時間以上)の時間を確保している割合は39%。わずかに増加したがもう少し生徒の実情に合わせながらも頑張らせる指導が必要であると思われる。(△)</p> <p>ア 肯定率 81%、イ 肯定率 83%、1人1台端末の活用やパフォーマンス課題の導入等、各教員の取組の成果が表れているポイントであると考え。(◎) しかし、ウ 同(保護者)「子どもは授業が分かりやすく楽しいと言っている」の肯定率 53%であり一定の数値は出ているが、一つ上の課題に取り組む粘りや思考力・判断力の育成が必要かもしれない。単に課題を課すだけではなく、生徒個々の理解度の把握が必要で、授業の時にしかできない学びを展開し、理解度に応じてどのような指導をすべきか考えていかなければならない。(○)</p> <p>ア 肯定率 80%、どの教科も講義形式だけでなく、発表活動を積み重ねている成果が表れていると思われる。(◎)</p> <p>イ 肯定率 85%、授業展開の中で、ペアワーク、グループワーク、その他協働作業による活動が増えたことによるもので、この活動を継続していくべきだと考えている。(◎)</p>

府立豊島高等学校

	<p>(4) 生徒の進路実現の支援 ア 早い段階での進路意識の醸成に努める。 イ 進学講習、one_day 勉強合宿の拡充 ウ 外部模試の計画的・積極的な受験を推進</p>	<p>(4) 生徒の進路実現の支援 ア 3年間の進路指導方針・計画の作成し、進路希望に合わせた進路指導および情報提供、進学講習等を計画的に実施し、早い段階での進路意識の醸成に努める。 イ 校内における進学講習や補習および土曜講習の拡充、夏季勉強合宿の継続及び one_day 勉強合宿の拡充をめざす。 ウ 外部模試の計画的・積極的な受験を推進し、生徒が自分の目標と到達度を的確に理解する指導体制を作る。</p>	<p>ア 4年制大学進学率 60%を維持。および土曜講習や夏季勉強合宿及び one_day 勉強合宿の参加生徒参加のべ人数を 150 名 (令和3年度のべ120名) イ 学校教育自己診断における「本校では、進路についての情報をよく知らせてくれる。」の肯定率 78% (令和3年度 75%) ウ 外部模試の分析会年間2回実施の維持と、生徒向け模試の解答解説会の実施</p>	<p>ア 4年制大学進学率 60%、夏季勉強合宿や one_day 勉強合宿の参加生徒参加のべ人数 253 名、進路指導部の担当者の努力がよく表れた結果となった。(◎) イ 肯定率 81%、3年生は他学年よりも約9P高く、1, 2年生段階での指導について、工夫をしていきたい。(○) ウ 実施している。(○)</p>
2 将来の寄って立つ軸を形成する取組みの推進	<p>(1) キャリアデザイン ア 自分の人生・生き方・進路について考えさせる イ 職業意識を育む。 (2) 人権意識の向上と自己肯定感の醸成 ア 講演等計画的な人権教育を実施いじめの未然に防止に組織的に取り組む。 イ 学校行事・学年行事の企画・立案・運営に生徒が関わる ウ 他者と望ましい人間関係・協働関係を構築できる人間性を育む</p>	<p>(1) キャリアデザイン (以下CDと記載) の推進 ア 自分の人生・生き方・進路について考えさせる「キャリアデザイン」を「ロングホームルーム」や「総合的な探究の時間」を活用して推進する。 イ 入学から卒業までの段階を踏んだCDプログラムに基づき、進路先の更に先にある職業意識を育む。 (2) 人権意識の向上と自己肯定感の醸成 ア 様々な分野・年齢の講師による講演等計画的な人権教育を実施し、豊かな心を育む教育を推進する。また、いじめを未然に防止し、早期に発見・解決するためにいじめに関する校内組織を中心に組織的に取り組む。 イ 学校行事・学年行事の企画・立案・運営に生徒が関わる機会を作り達成感を覚える取組みをする。 ウ 集団活動を通して、他者と望ましい人間関係・協働関係を構築できる人間性を育む。</p>	<p>(1) ア 将来の進路や生き方について考える機会がある」の肯定率 85% (令和3年度 82%) イ 同上 (2) ア 学校教育自己診断 (生徒) 「本校では、人権尊重や命の大切さについて学習する機会が多い」の肯定率 84% (令和3年度 82%) イ 「本校入学後、自分は前より成長したと思う」の肯定率 84% (令和3年度 82%) ウ 同上</p>	<p>アイ 肯定率 85%、次年度以降は LHR や「総合的な探究の時間」を含めた各教科科目の指導においても、将来像について考える場を増やしていきたい。(○) ア 肯定率 91%、人権教育を継続的に行い、教科での指導等も含め、生徒に伝わっていると思われる。(○) イウ 肯定率 88%、行事などの活動が徐々に再開できていることや日々の教員の指導が実を結び、自己肯定感のアップにつながっている。さらに肯定率を上げたい項目になる。(○)</p>
3 自主・自律の精神を養い、社会そして世界に繋がる生徒の育成	<p>(1) 社会性を育むために生徒の規範意識を高め、通学マナーの向上とあいさつ運動の励行 ア 時間管理 (自己管理) の意識向上 イ 挨拶の励行 ウ 「薬物乱用防止」、「情報リテラシー・モラル」の育成 エ 規範意識を高める (2) 特別活動・生徒会活動・社会貢献・国際交流を通じて自主・自律の精神を養い、地域社会との繋がりや国際感覚を身につける。 ア 部活動充実 イ 成果発表の機会を設ける。 ウ 部活動を中心とした清掃活動 エ 生徒会活動や学校行事の活性化 オ 語学研修や海外の高校との交流</p>	<p>(1) 社会性を育むために生徒の規範意識を高め、通学マナーの向上とあいさつ運動の励行に取り組む。 ア 時間管理 (自己管理) と時間を守るという意識の向上を図ると同時に、授業のベル即開始を徹底する。 イ 毎日の登下校時及び毎授業時間の開始・終了時の挨拶の励行。 ウ 「薬物乱用防止」、「情報リテラシー・モラル」の育成に努め、特に情報や情報技術を適切かつ安全に活用していくための資質・能力を身に付けさせる。さらに、生徒が加害者にも被害者にもならないよう取組みを行う。 エ 「挨拶」・「服装」・「頭髪」・「規律」・「自転車のマナー」等に関する生徒の規範意識を高めるため、家庭との連携のもとに日常の学校生活のあらゆる場面において全ての教員が積極的に生徒に声をかけ指導する。また地域連携も含め「交通安全講習」等の講習会等、保護者への情報提供・発信を行い、取組みに対する連携を図る。 (2) 特別活動・生徒会活動・社会貢献・国際交流を通じて自主・自律の精神を養い、地域社会との繋がりや国際感覚を身につける。 ア 部活動充実のため、入学時のクラブ紹介、体験入部の企画を継続する。 イ 文化祭や2月祭で文化系クラブ等の生徒の学習の成果の発表の機会を設ける。 ウ 部活動を中心とした清掃活動を継続し、校内の特定箇所の集中清掃や校外の地域清掃を行う。 エ 生徒会活動や学校行事の活性化を継続して行い、生徒が主体的に運営する機会を増やす。 オ 文化や習慣の違いを尊重する精神等を育むため、語学研修や海外の高校との交流 (オンラインも含めた) を促進する。</p>	<p>(1) アイ 学校教育自己診断 (生徒) 「学校生活について先生の指導には納得できる」の肯定率 60% (令和3年度 58%)、 ウ 同 (保護者) 本校の生徒指導の方針に共感できる」の肯定率 65% (令和3年度 60%) エ 「本校の生活指導は、家庭との連携のもとに行われている」の肯定率 55% (令和3年度 45%) (2) 学校教育自己診断の生徒「学校行事および部活動における平均肯定率」の肯定率 80% (令和3年度 75%)</p>	<p>アイ 肯定率 68%、課題は色々多い面もあるが、教員の指導が少しずつ浸透してきている。(○) ウ 同 (保護者) の肯定率 74%、学校の雰囲気や保護者も同時に感じるようになっていくように推察される。次年度以降もより保護者との連携には力を入れていきたい。(○) エ 肯定率が 67%で R3 よりも 22P も上昇していることから学年の教員の取組が評価されたものと読み取れる。(◎) 肯定率 79%、部活動加入者を増やすこと、学校行事の充実、時間をかけて徐々に作り上げていくものなので、継続的に取組を進めていく。(△) コロナの影響もあり語学研修等の活動に取り組めていない。</p>

府立豊島高等学校

<p>4 学校全体の課題を共有して、解決に向けての組織づくり</p>	<p>(1) 分掌部会等の開催と他分掌や学年との連携を高める ア 業務の効率化について検討をすすめる イ 運営委員会等の既存組織を中心として活用推進 ウ 分掌間、分掌と学年の連携を高める</p> <p>(2) 教員の働き方改革への取組みを推進 ア 毎月の安全衛生委員会で、新たな取り組みを検討 イ 会議の効率化、ペーパーレス化を図る。 ウ 検討～決定のプロセスをスムーズにして会議時間の短縮を図る</p> <p>(3) オンライン授業の構築と取組みの推進 ア 校内環境のさらなる整備とオンライン授業実施に向けた対策を講じる。 イ 日常の授業でも1人1台の活用をすすめる</p> <p>(4) 広報活動と地域連携の充実 アできるだけ多くの情報発信に努める 学校説明会や中学校との連携をさらに充実させ、広報活動に取り組む。 イ生徒・保護者・教員・同窓会等の連携体制を推進していく。</p>	<p>(1) 分掌部会等の開催と他分掌や学年との連携を高める ア 業務の継承を行い、業務の効率化について検討をすすめる。業務マニュアルの見直しを含めて総括を行い、次年度への改善点の洗い出しを行う。 イ 運営委員会等の既存組織を課題解決の中心として活用推進する。 ウ 分掌間、分掌と学年の連携を高めるための取り組みを実践する。</p> <p>(2) 教員の働き方改革への取組みを推進 ア 毎月の安全衛生委員会で、教員の時間外在校時間を報告し、新たな取組みを検討していく。 イ 様々な会議資料の事前配付により、会議の効率化、ペーパーレス化を図る。 ウ 運営委員会や職員会議等各会議において、事前に検討課題を担当者や関係部署に提示をして意見集約をしておき、検討～決定のプロセスをスムーズにし見える化をしながら、会議時間の短縮を図る</p> <p>(3) オンライン授業の構築と取組みの推進 ア GIGA スクール構想に向け、校内環境のさらなる整備と休校等の際の学びの保障（動画配信・オンライン授業）、教材配信の実施に向けた対策を講じる。 イ 日常の授業でも1人1台の活用をすすめる、オンライン授業に切り替えてもスムーズに生徒が取り組めるように取り組む</p> <p>(4) 広報活動と地域連携の充実 ア ホームページの全面改訂に伴い、適時更新などできるだけ多くの情報発信に努める。コロナ禍の中であっても、学校説明会や中学校との連携（中学校訪問など）をさらに充実させ、広報活動に取り組む。 イ 創立50周年を見据え、生徒・保護者・教員・同窓会等の連携体制を推進していく。</p>	<p>(1) ア 学校教育自己診断の「本校では、様々な教育問題に対して、学校全体で日常的に話し合っている」の肯定率 50%（令和3年度 39%） イ 「HR 運営や生徒指導等について教職員の連絡体制や研修体制が充実している」肯定率を50%（令和3年度 42%） ウ 運営委員会をできるだけ毎週行い分掌学年の情報交換を密にしていく。また、職員会議の時間について 50 分以内を目標とし、その後にミニ校内研修の実施を年間 10 回以上行う。</p> <p>(2) アイ 職員会議の時間について 50 分以内を目標とする。また、職員会議だけでなく各会議時間の短縮のため、資料のペーパーレス化、事前配付を行い、会議の効率化を図る。</p> <p>(3) ア 学校教育自己診断（生徒）の「本校の授業では、ビデオやコンピュータを活用している」の肯定率 84%（令和3年度 81%） イ 同上</p> <p>(4) ア 学校教育自己診断（保護者）「本校は、教育活動の中身について、学年便りやホームページで情報提供している」の肯定率 76%（令和3年度 73%） イ 総合企画部を中心に、同窓会との連携を高めていく。</p>	<p>ア 肯定率 64%だが、まだまだ連携や情報共有は必要で、スムーズな生徒対応のためにも、もう一段階の工夫が必要と感じている。(○) イ 肯定率 64%、来年度は教員研修を増やしていく予定にしている。教員が最新の情報を掴むところから始めなければならない。(○) ウ 働き方改革もあり運営委員会の回数は増やさなかった。6月後半からペーパーレスの資料に切り替え、職員会議の時間についてはほぼ 50 分以内にはできた。ミニ研修は5回しかできなかったが、学習支援クラウドサービスの活用研修を情報担当の教員が積極的に取り組んでくれた。来年度はさらに次の段階に進めていきたい。(○) アイ 運営協議会資料についてもペーパーレス化したので、来年度は資料内容を精査しながら、すべての会議のペーパーレス化、事前配付を行い会議の効率化を図る。また、分掌や学年からの発信を行い、所属分掌以外の進捗や情報共有のシステムを構築したい。(○) アイ 肯定率 93%、次年度以降はデジタル教材の共有や共同開発などにも取り組んでみたい。また授業展開において、他の生徒との意見交換などにも端末を活用した授業ができるようにしていきたい。(○) ア 肯定率 87%、ホームページの全面改訂が功を奏していること、メール等の配信についても小まめに行った結果であると思われる。来年度は新しいグループウェアを導入しさらに前進させていきたい。ただし、校長や部活動ブログ等の配信回数がまだまだ少ないので、次年度はその点に力を入れたい。(○) イ 50周年記念事業について始動する。</p>
------------------------------------	--	---	--	--